

平和学習講座7月13日(木)7限 感想抄 特集号

講師：藤井 幸恵先生 (広島平和文化センター派遣講師)

- ・小学生から何度も平和学習で講演を聴いてきたが、今までで一番丁寧にわかりやすく、聴く側が引き付けられる内容だったと思う。投下が広島に決まった過程や、原子爆弾の構造、『はだしのゲン』の作者である中沢さんの話など、改めていろいろな内容について学ぶことができた。
- ・毎年同じような平和学習をしてきて、何で毎年やるのかと思っていたが、広島に生まれた自分たちにとっては、自分が平和学習することに価値があるのではなく、自分たちが伝えていくことが本当の平和学習をする目的ではないかと思うようになった。自分たちが当然のように毎年やってきたことをまだ知らない人に伝えることが、今の自分たちがやるべき平和学習ではないかと思った。
- ・表面温度7,700度の爆弾が3秒間も上空にあるなんて考えただけで恐ろしいです。今、世界では核兵器廃絶への取り組みが行われているが、1,540発の核爆弾があるうち、4,120発が、実戦整備されているのが現状で、全体の取り組みも大切だが、ひとりひとりの意識も問われていると感じました。
- ・こんなにも心に突きささる話は初めてでした。私たちは今、高校2年生となり、昔よりも、原爆のおそろしさについて知り、それを伝えることばも力もあります。若い世代の私たちが、原爆、核兵器、そして戦争の醜さ、悲惨さを伝えていかねばならないと、今日改めて強く思いました。
- ・小学生の頃から何度もヒロシマの原爆について学んできたが、同じ内容でも、昔と今では感じ方が違った。とらえ方も少しずつ変わるし、本当のおそろしさに気づくために、何度も学ぶ必要があるのだと今日初めて思い知らされた。新しく知ったこともあった。よく知っているつもりでも、見えていないことは本当にたくさんあると改めて思い知らされた。
- ・心に残ったことば…「核兵器が存在する限り、私たち人類の誰もが被爆者になる可能性がある」
- ・心に残ったことば…「みなさんは広島にまかれた1つの種」
- ・核を持たないという条約になぜ日本が署名しないのか知りたい。…多数あり。
- ・被爆者からの話をきくことができる最後の世代であり、簡単に世界中の人と繋がることのできる新しい世代として、原爆被害を語り継ぎ、平和の大切さ、核の非人道性について発信、共有していきたいです。私が初めて平和記念資料館に行ったのは幼稚園に入る前で、説明文もほとんど読めませんでしたが、ただ人形の展示や焼けこげた衣服が怖くて怖くて泣きながら歩いたのを覚えています。原爆投下のあの時も、あの場にいた人たちも、きっと何が起こったのかわ

からず、怖くて苦しくて熱い中を歩いたはずです。直接被爆者の方の話聞くことができるのも、限りがあります。資料館の役割は、そんな状況の中、大きいと思います。幼い頃の私のように「原爆はこわい」と思うところからでも、多くの人に感じてほしいです。

- これは持論ですが、「核兵器の廃絶」は100%に限りなく近い割合で不可能だと考えています。今、世界で「核兵器」による武力の威嚇というかたちで「仮りの平和」が成り立っていると思うのですが、米、露など先頭にたつような国が核を廃絶したら他国からの侵略などを受けかねないのではないかと。「大国」というものは、何かしらの強い象徴が必要であり、廃絶が大切なのはわかっていますが、仮の平和を作っているという役割があるように見え、自分としては、どちらかを選択するのは困難だと考えます。
- 伝えていく手段として「演劇」というものに出会うことができ幸せだと感じました。より一層、そのような作品に関わっていくことの重要性和責任、重みをひしひしと感じました。段々と語り部の方々がおられなくなっていく現状は変えることができません。私たちが変わっていくべきだと思います。伝えていくべきものを見つけ、この出来事、この想いを絶対に途切れさせてはいけないという気持ちが強くなりました。
- 何回、原子爆弾のことを学んでも苦しい気持ちになるのは変わらない。相生橋を投下目標としていて、400mしか離れていない所に投下できたのは、当時でもそれだけの技術があったということで、今考えると恐ろしい。何よりも思ったことは、ヒロシマ、ナガサキという2つの被爆地をもつ日本が平和に向けてあまり動けていないという矛盾についてだ。私たちのあり方を考え直さなければいけない。
- 今日初めて知ることも多くあり、さらに知っていく努力をしないといけないと思いました。ヒロシマにいても全てを知り、伝えていくことが難しいとなると、広島や長崎以外では、ほとんど知られていないのではないかと思います。世界に伝えていくこともですが、まず日本で平和について考える人が増えて欲しいと思いました。
- 今回の講演は「核兵器」が中心にあったが、その内容の本質は戦争全般について考えることだと思う。戦いのなかで、個人個人のもつ人間関係や想いは忘れられ、やがて悲劇がうまれる。「キノコ雲の下の人々」という言い回しがとても印象的だった。ひとりひとりの尊い命が犠牲になってしまうからこそ、ひとりひとりが考え、私たち（We）で取り組まなければならぬのだろう。さまざまな主義主張があるなかで、平和のことばを貫くのは難しいことだと、今の日本を見て思う。しかし、誰かに伝えることならできるはずだ。まずは自分が平和を忘れずにいること、それが大切だと感じた。

●平成29年度 平和慰霊式典（市女慰霊式典） 8月6日（日） 10:00～、前日 清掃

当日の式典では、献花、クラスで折った折り鶴の献鶴、詩の朗読、校歌の演奏などが行われ、生徒会、演劇部、放送部、音楽部、吹奏楽部など、多くの生徒の皆さんが毎年参加、手伝いをしてきています。また、前日には慰霊碑付近の清掃やテントの設営などを手伝う部もあります。

今年は参列できなくても、やがて卒業して同窓生となった皆さんが、次世代に引き継ぐ者となり、式典に携わっていくことを願っています。